

チェック!

効果的なワクチン接種で 日本脳炎を防ぐ



昨夏の猛暑で豚にさまざまな影響が出たのは記憶に新しいですが、今年も暑く、残暑が続く予想です。昨年の経験をふまえ、換気扇・細霧装置等の増設や、分娩舎へのダクトファン設置等の施設面で夏場対策の準備をされていたとは思いますが、やはり暑さは豚にはこたえるものです。そこで今回は母豚への夏場対策の再確認と、夏場に蚊が媒介する日本脳炎の対策について紹介します。

●母豚への夏場対策の再確認

妊娠中の母豚、ほ乳中の母豚に必要なことは「飼料を食べて必要な栄養分をとること」です。しかし、暑い時期は食欲が落ちてしまい母豚が必要とする栄養分が不足しがちになることも考えられます。

このため、母豚への夏場対策はどのようにして母豚に必要な量の飼料を食べさせることができるかということになります。以下に確認すべき項目をあげます。

①母豚への給水量が確保されているか

母豚が飼料を食べるには水を飲むことが不可欠です。ピッカーからの流水量が確保できているか、目詰まり等はないか定期的に確認してください。

②飼料を十分食べているか

飼料の残しが多いなどの問題が発生した場合は1日当たりの給与回数を複数回にするなど、給与回数・方法を検討してください。その際、ビタミンやミネラル類が含まれた市販のサプリメントを配合飼料に添加することも有効です。

③体調の悪い母豚はいないか

毎日の管理の中で早めに体調の悪い母豚を見つけ、対応してください。必要に応じて獣医に相談しましょう。

●日本脳炎対策について

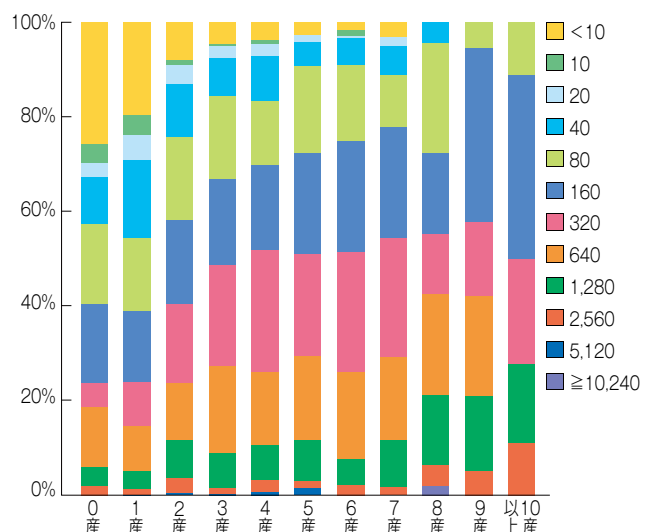
日本脳炎は日本脳炎ウイルスによって引き起こされる豚の繁殖障害です。雌豚では不妊、産子数の減少または死産（*黒子、白子）が起こり、雄豚では精子をつくる機能が低下し不妊症となることが報告されています。

日本脳炎ウイルスは蚊（コガタアカイエカ）を介して豚から豚へ伝播することから、予防としては蚊が動き出す夏前までの母豚群へのワクチン接種が実施されています。市販ワクチンには生ワクチンや不活化ワクチンがあり、パルボウイルス等との混合ワクチンを使用する場合もあります。

Dr.ジニアの検査室では母豚群を対象に定期的な日本脳炎に対する抗体検査を実施しています。

平成21年度の検査結果では若い産歴の母豚（0産、1産目）で日本脳炎ウイルスに対する抗体が陰性の割合が高く、さらに2産目以上の母豚においても割合は少ないですが抗体陰性の個体が認められました。このことから、日本脳炎ワクチン接種は育成豚、初産豚へのワクチン接種はもちろんのこと、経産豚群へのワクチン接種も忘れずに実施してください。さらに、近年の温暖化の影響からか、豚舎環境がよくなったためか地域によっては蚊の生息が年末近くまでであるという話も聞きます。ワクチン接種方法についても、農場ごとに日本脳炎ウイルスの浸潤状況を調べながら検討することが必要となっています。ジニアの検査室を利用してぜひ効果的なワクチン接種法をご検討ください。

日本脳炎ウイルスに対する産数別抗体陰性の割合



日本脳炎 2009年度 抗体価